

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和三年六月一日発行 第八十七号

檀信徒の皆さまこんにちは。私は月に一回、兼務住職をしている中津の吉祥寺というお寺に合同供養に伺っています。とても熱心なお檀家様がいつも温かく迎えてくださり毎月の楽しみでもあります。五月に宇佐インターを降りた時には麦畑が、まだ黄金色を伸ばしていました。今年は刈り取る前に梅雨を迎えてしまいました。今年はお祭りの晴れを使つて収穫が出来たのか気になっています。

さて三月に続いて、五月の講習会ではスツタニパータ聖典からお釈迦様のお言葉を紹介いたしました。スツタとは「お経・縦糸」、ニパータには「集まり」といった意味があります。仏教以前のベータ聖典やジャイナ教などとも似た言い回しが多くあり、仏教聖典の中でも最古のお経と言われています。日本でも詩や俳句が好まれるように、インドでは詩を読むのが日常の様で、聖典の中の短文も詩のような形式を取り、韻を踏みながら少しずつ意味や言葉が変えられています。当時は書物に書き残すことなく口頭で伝えられていたことは以前にも紹介をしました。日本での句会の集まりの様にして、世の中の真理を詩の形式にして楽しんでいたのだと想像すると、経典の味わいも違ってきます。

蛇の毒が（身体のすみずみに）ひろがるのを薬で制するように、怒りが起こったのを制する修行者（比丘）は、この世とかの世とを共に捨て去る。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

悪い習慣がいささかも存在することなく、悪の根を抜き去った修行者はこの世とかの世を共に捨て去るようなものである。蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。

中村元 著 「ブツダのことば」より

仏教では貪瞋痴の煩惱の事を三毒と表現します。貪とは「むさぼり」。瞋とは「怒り」。痴とは「ぐち」の事です。これらが身体の中に入ってしまうと蛇の毒が身体を害するが如くに心が侵されてしまうので三毒と呼びます。しかも恐ろしいのは、蛇の毒に身体が犯されれば、しびれや吐き気などの異変を感じますが、これらの三毒に害されても心が浸食されていくことに気が付きにくいというのが特徴です。また毒された時には直ちに解毒剤の服用を必要とします。蛇の毒が身体のすみずみにまで広がってしまったからでは、解毒剤の効き目がないように、三毒に犯された時には、なるべく早くに気が付き、反省をして自己コントロールをするのが解毒剤となります。右の文章を見ても「滅する」というような表現ではなく「制する」とあります。特に「むさぼり」とは生命の根源的なエネルギーであり、気力

などの源とも言えるかもしれません。「母親から生まれたばかりの赤子でさえ拳を握っている。これは人間の所有欲を表している」と聞いたことがあります。この根源的なエネルギーを無くしてしまうのは、それこそ死にいたるまで不可能なのではないかと近頃は特に思うのです。人間と動物の大きな違いは言葉と火を用いることです。火を使うことにより調理を行ったり様々なモノを加工して私たちは生活を豊かにしてきました。煩惱の炎に犯されるのでなく制することにより、更なる発明や進化が加速します。これが真言密教の言う所の「煩惱即菩提」です。しかしながら制していると思っても知らぬ間に侵されてしまっていることも往々にしてあります。達観して自己を見つめることほど難しいことはありません。そのことが分かっていたら他人の意見を謙虚に受け入れる姿勢を持たねばなりません。上手くいっている時や、逆に滞ってしまっている時ほど受け入れがたくなってしまう。日常からの心掛けや鍛錬が必要になります。これらに効果があるのが瞑想ではないかと感じています。

日時 七月八日（木曜日）十四時から
演題 「ご先祖さまは何処にいる？」
講師 宗園院住職 藤田修弘さん

緊急事態宣言が出なければ講習会を行う予定にしています。